



郭沫若の日本観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 淑琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010108

郭沫若の日本観

張 淑 琴

はじめに

中国の歴史における渡日留学のブームは、大きく二つの時期に分けることができる。その一つは、世界的な激動変革の時代、近代である。つまり 1898 年から 1949 年ごろまで、数え切れないほど数多くの中国人が日本にやってきた。もう一つの留学ブームは、1980 年代に入り、中国が改革開放の政策を実施してから現在に至る時期である。とくにここ数年来、来日する中国人が年々が増え続けているが、彼らの渡日の目的及び行動が常に世間の関心を集めてきた。しかし、この二つのブームの中国人留学生は同質ではない。第一のブーム、すなわち、近代に日本に留学した中国人留学生は、その抱負や不遇な人生、彼らの異国における体験、また帰国後の境遇は様々である。しかし、彼らの自覚的・無自覚的な努力こそが、各方面で現代化への道を探索していた「新中国」に前向きな刺激を与え、「新中国」の重要な基礎を作り上げたことを見落としてはならない。特に、彼らと日本の友人との交流が、日中関係に少なからぬ影響を与えたことはよく知られている。彼らは、一体どういうふうに見つめていたか、言い換えれば、彼らの目に映った日本の素顔はどのようなものであったか、という疑問を抱き、筆者はこの研究を開始した。

多くの関連資料を調べた結果、日本でも中国でも、この領域に関する系統的な研究が意外に空白に近い状況であることがわかった。そこで、筆者は、近代における何人かの中国人の日本観を分析することにより、日中関係史における極めて複雑な時代、すなわち近代に対する従来の認識を見直したいと考える。同時にこのことは、八十年代に入ってから第二次留学ブームに乗った留学生たちに何らかの啓発を与えることにもつながるのではなからうか。また、彼らの見た日本、つまり、彼らの日本観の研究は、日中文化交流史において有益かつ有意義な成果を得ることができるであろうと確信している。

しかしながら、この百年以上の歴史の中で、数多くの日本留学体験者の足跡を辿りながら、中国人の日本観を研究するのは、けっして容易なことではない。かつて私は、最も代表的な留日体験者で、日本と深くかかわりを持ち、後に中外に名をとどめた文人、周作人や郁達夫と日本との関係、及び彼らの日本観を研究した⁽¹⁾。親日派とも言われ、門を閉じて、静かに日本文化を語り続け、後に中国人の裏切りものと見なされた魯迅の実弟・周作人の日本観と、時代の流れと共に、心の底から日本に愛着しながら、日中戦争の先頭に立って戦い、あげくのほかに日本の憲兵に殺された郁達夫の日本観は、一部の近代中国知識人の日本観をそれぞれ代表することができるだろう。しかし、同じく日本留学体験者で、後に中国政府の要職に就いた人も少なくなかった。彼ら政治家の目に日本は、どのように映ったのであろうか。小論におい

ては、その続編として、中外にその名を馳せた文人・政治家郭沫若を中心に考察したい。郭沫若を取り上げ、彼の日本観の内容と実質の分析を通して、周作人と郁達夫との相違点を見出すことができるのではないかと思う。

1. 郭沫若の日本観

(1) 郭沫若の日本観形成の諸要素

郭沫若(1892~1978)は、中国近現代の有名な作家・詩人・歴史学者・考古学者と古文字学者であり、かつ著名な政治活動家でもある。四川省楽山県に生まれ、名は開貞、号は沫若。年少にして四書五経を読み、半植民地の中国を憂えた。1914年に日本に留学、九州大学医学部に学んだが、文学を志し、帰国後に文芸活動に携わり、1918年から新詩の創作を始めた。1921年に処女作・詩集『女神』を出版した。1926年に「北伐戦争」に参加、国民革命軍総政治部主任に就任し、1927年8月に共産党員になった。1928年から約十年間、日本に亡命した。日本滞在期間には、中国古代史、甲骨文と金文の研究に没頭し、留日青年と中国文芸界の革命文芸活動を積極的に支持し、帰国後、抗日救国運動に参加した。新中国成立後、中央人民政府委員、中国科学院院長、中日友好協会名誉会長などを歴任し、1978年6月に北京で病死した。『青銅時代』と『奴隸時代』などの多数の歴史小説を著した²⁾。

郭沫若はあわせて二十年に亘り、日本に滞在した。周知のように、彼が日本と直接に関係を結んだ時期は、二つある。第一の時期は、彼が日本に留学した十年、すなわち1914年から1923年までの時期であり、第二の時期は、いわゆる日本に亡命した十年(1928年~1937年)、すなわち、千葉に隠居の生活を送った時期である。長期間二度にわたって日本に滞在したことは、彼の日本観の形成に大いに影響を与えたはずであり、むしろ決定的な作用を及ぼしたと考えてよからう。この時代の歴史背景、とくに日中関係の緊張や日中戦争の拡大などの厳しい客観的条件も、彼の日本観の形成にとって見落とすことのできない要因となったであろうことは言うまでもない。以下、郭沫若が留学した時期と亡命した時期の時代背景を考察してみよう。

郭沫若が、はじめて日本の国土に足を踏み入れたのは、1914年1月であった。その二年前に、父母の意志で彼は見知らぬ女性と結婚させられたが、この息苦しい雰囲気 of 封建的婚姻から一刻も早く逃げようと思ひ、そして故郷四川からどうしても離れたかった。その時の彼にとって最も理想的な留学地としては、まず欧米であり、次に日本、またその次に京津(北京、天津)と上海であったという。1913年8月に北京にいる兄と相談の末、同年の12月に日本に赴く旅が始まった。当時の彼は23歳で、「富国強兵」策の影響を受け、国家のため人民のために心を砕き、「専門の技術」を身につけようとの志を抱き、医学を学ぶ決意をしたのである。

当時中国と日本の間には、五つの学校に官費留学の契約があった。すなわち、東京第一高等学校、高等師範学校、高等工業学校、千葉医学専門学校そして山口高等商業学校である。この五つの日本国立学校のいずれかに合格すれば、中国政府から官費を貰えた。郭沫若は、日本に

着いてから、半年間の必死の努力で、東京第一高等学校予備科に入った。郁達夫、成仿吾と同じ学校であった。1915年の秋、岡山第六高等学校に配属され、1918年に卒業後、福岡市にある九州帝国大学に進学したが、まだ医学専攻の意志は変わっていなかった。

ここで、強調しなければならないのは、彼の日本留学の目的とその後医学の道に進んだ理由である。彼は単に四川省を離れたかったのではなく、日本の学校に入って、専門知識を学び、国のために自分の力を捧げたいという強い愛国心をもっていたのである。郭沫若は、自伝の中で次のように述べている(3)。

この時期に医学科の試験を受けたのは、国内の軍医学校に入ろうという心理とはまったく違った。私は、本当に真面目に医学知識を学び、国家社会に切実な貢献をしたかった。

こうして、九州帝国大学医学学部で学び、四年半後、1923年に無事に卒業し帰国した。

この日本での留学生活が、彼が最初に日本と接触した時期である。この留学時期の体験と彼の行動、及び日本観の形成等については、のちに詳しく論じるつもりであるが、次に、日本と直接関係を結んだ亡命十年の第二の時期の経緯に簡単に触れておきたい。

1926年から1927年の初め頃、郭の身边は厳しい状況に置かれていた。彼は、この時期、積極的に中国の革命運動に参加し、理論と実践運動を結合して創造する活動を益々強めていた。26年には『文芸之社会的使命』、『文芸家的覚悟』等の代表的な評論を発表している。

折から、国共合作のもとに、軍閥打倒の国民革命が進行しており、1926年7月に蒋介石を総司令とする国民革命軍が北伐を開始し、27年3月には南京に入城したが、ここでついに列国の干渉に遭い、蒋介石は反共政策に転じた。郭は北伐に参加し、武昌攻撃の年に総司令部宣伝長を勤め、国民党左派と党内の共産党との連合体である武漢政府における総政治副主任として刻々と変化する複雑な政治情勢の渦中であって、優れた能力を発揮していた。郭沫若は、知識人のなかでも、最も重要な政治的役割を果たした一人であったので、当然国民党の追求の手は厳しく、それを逃れるために1927年10月下旬に香港から密かに上海に帰り、潜伏していた。しかしこういう情勢に直面した彼は、共産党の手配によって、一家を挙げて、ソ連に逃げようとしたところ、あいにく、出発直前に郭が重病にあい、ソ連へ行く機会を逃した。1928年2月24日に夫人の安娜を連れ、日本行きの船に乗った。渡日後は千葉県のある田舎に隠居したが、1937年に帰国するまで、そこで、十年間の隠居、いわゆる亡命十年の生活を過ごした。これが、二度目の日本滞在の体験であった。

前後二十年の長い歳月を日本で送り、様々な体験をしたことは、彼の日本観の形成に決定的な作用を及ぼしたことはないまでもない。以下にその影響について、彼の日本観の内容と実質を掘り起こしながら、分析していこう。

(2) 郭沫若の日本文化観

(イ) 日中文化交流史から見た日本文化の包容力

郭沫若の多くの作品や言論から、彼が、日本文化に関する独自の見識を持っていたことが分

かる。たとえば、1935年「日中文化の交流」という講演の中で述べた内容によく示されている(4)。

また、1935年10月5日、郭は中華キリスト教青年会の馬幹事長の誘いに応じ、「中日文化の交流」というタイトルのスピーチを行なった(5)。彼は、まず、中日文化の相互関係をこう語っている(6)。

資本主義以前の文化は、中国から日本に流れていた。資本主義以後の文化は、日本から中国に流れている。日本に流れてきた資本主義以前の文化は、日本で、十分な成功を収めたが、日本から中国に流れてきた資本主義以後の文化は、結果としては、充分にあらわれず、失敗したようだ。

この短いながらも、洗練されている論述こそ、中日文化交流史の一つの完璧な総括だと言えよう。中日文化交流の相互関係と、それが生み出した効果によって、中日文化の違いを単的に明らかにしている。なお、ここでの資本主義という言い方は、近代の開始と解釈すればよいであろう。

この論述には、当時、一人の歴史学者らしい郭沫若の態度もよく示されている。それまでひたすら「大中華思想」を抱えてきた中国文人の間に、中日文化の逆流現象を自覚させたのは、郭沫若のような進歩的で、開明的な学者だったのである。郭は、単に中日文化の相互関係を述べるだけではなく、日中の文化的な相互交流の結果にも注目し、日本文化の素晴らしい包容力の大きさを賛美している。これは彼の日本文化観の一面である。

郭が引き続き、歴史学、特に考古学の角度から、歴史の発展段階ごとに、中国文化の特徴と変化を述べ、特に中国の戦国時代に日本人が初めて中国文化と接触して以来、中国文化が朝鮮半島を経由し、日本に入り、隋唐時代になって、日本が文明国となった点を強調している。また、唐の時代の遣唐使(有名な空海の物語にもふれる)の派遣により、中国文化が日本の仮名文字の誕生や文学などの発展に大きな影響を与えたとして、次のように述べている(7)。

要するに、我々は、日本があふれんばかりの熱情で中国文化を受けたという結論を得た。

日本の東洋史学者、京都帝国大学教授内藤湖南博士の透徹な論説があった。彼は、こう語っている。「日本民族は中国文化と接触する前には鍋の中に入ったいっぱいの豆乳だった。中国文化はアルカリ水のように作用し、日本民族は中国文化と接触したら、豆腐になった。」これは日本の学者の見方であるが、要するに資本主義以前の中国旧文化は日本に完全に流れたのだ。

郭は、このほかにも日本文化と中国文化の近代に入る前の関係について博引傍証して説明している。

日本文化が一体独自なものを持っているかどうかについて、郭は「当然、日本文化には固有な成分があるが、その動機と方法を言うと、みんな中国から学んできた。」という結論を出した(8)。

中日間の文化の流れは、資本主義以前までは、中国からであった。日本はその精華を吸収しながら、現在の日本文化を形成したが、資本主義以後、とくに欧米文化との接触の仕方は両国

で大いに違っている。中国は欧米からの文化の受容に失敗したが、日本は、それに成功した。この両極端な結果をもたらした原因についても、郭は詳しく分析している。ここで、日本が成功したいくつかの要素について、郭の論説を引用してみよう(9)。

第一は、日本は範囲が小さい。我々が、日本の田舎へ行ってみると、そこでは山にしろ谷にしろ、みんな開墾されている。日本の人口は日々に増し、もし古い生産方法を利用したままなら、生活を維持するのは容易ではない。

第二、中国民族の要求は、日本の生産発展を十分に促しているのだ。

第三、日本には固有の文化もあり、中国から伝わってきた文化もある。詳しく言えば、日本の負担は中国のような重さにはならないので、走りだしたら速い。

第四、日本は変革時代に明治天皇がいた。彼のもとには、西郷隆盛、大久保利通や伊藤博文などの為政者がおり、彼らは非常に合理的に文化を指導した。その時、日本は西洋文化に対して、全面的に熱情をもって受け取ったのであった……

西洋文化への受容に日本が成功した原因として、郭は上記の四つの要素を指摘した。ここで、原因の第二番目の「中国民族の要求は、日本の生産発展を十分に促しているのだ」、ということについて説明を補足しよう。実は、郭沫若は自伝『学生時代』の中で、当時の日本経済の著しい発展の様態を次のように描出している(10)。

多くの普通の家屋が様々な小規模な工場に変わった。彼らの最大の販路はいうまでもなく我々偉大な中華民国だ。中国人は日本人に代わって多く成金を作り出した。

と書き、その原因の三としては、郭はここでは、簡単に触れているだけであるが、筆者は次のように理解している。日本文化の中には、固有の文化もあり、中国から輸入してきた外来文化の部分も含まれている。これに対して、中国文化は、もともとから固有文化、すなわち「伝統」として存在していたため、この「伝統」を破るのは、極めて容易なことではない。とくに「大中華思想」を自尊してきた中国人は、外来文化への排除的な情緒を持っていた。故に外来文化である「西欧文化」と直面した時、中国人の背中に負った重荷は日本人より遥かに重かった。

西洋文化の輸入に成功した日本文化の包容力の強さを賛美している郭の、この考え方こそ、彼の日本文化観の核心である。彼は、外来文化の精華を吸収することによって、日本はその独自の文化を生み出したと認識している。そして、中国文化から日本文化に与えた影響が至るところに見られることを強調したのである。

(ロ) 日本の習俗から見た日本文化の包容力

郭は、日本の風俗習慣から、日本文化が中国文化の影響を受けたことをさらに論述する。その例として、「日本の畳」をあげる。これは中国古代の「席地而坐」(地面にむしろを敷く、またその上に坐ること)と同じものであると言っている。

また、日本の茶具の有様も中国の影響を受けたとする大胆な発言も飛び出す。彼は、こう述べる(11)。

日本に来た初め頃、お茶を飲む茶具を見た。一つの小皿に五つの小さい湯飲み茶碗が載り、

小さい急須が一つある。……最初、これは日本固有の文化だと思ったが、実際はそうではなかった。……潮州での茶具は日本と同じだ。しかも、湯飲み茶碗がお猪口より小さい。……日本の茶具は進化して、大きく発展したものだ。

郭はさらに生活習俗の中の多くの例をあげて、中国文化を十分に吸収した日本独自の文化が形成されたことを述べ、日本文化の包容力の大きさを論じている。日本文化の来源およびその様相について、一つ一つこと細かく検証しながら論述し、独特な日本文化論、日本文化観を提示している。

1936年2月2日に「刺身」という文を書いたが、語学的に「刺身」の発音の由来と中国語の発音を比較して、「刺身」が中国から来たものだと断言する。文の冒頭に「日本人が食べた刺身(sashimi)は、中国から伝わってきた習慣だ。」と述べている(12)。

また、最も面白いのは、「生魚」を食べるとき、つける醤油の名は「三滲醬」という。この三文字は中国古音では「samasiam」、潮州人は今もこの古い発音を守っている。彼らはこの言葉を言うとき、前の「m」音を殆ど発音しないので、「sa,siam」と聞こえるが。この「sa,siam」は日本の「sashimi」の語源ではなかろうか。

郭はさらにこの「m」の省略、いわゆる「収唇音」(唇を収め、発音する)の他の例を多く挙げ、中国語の昔の発音と日本語の訓読みとを比較している。このように郭沫若はこれらを分析した結果、日本文化が中国の影響を強く受けたことを実証しようとした。

生活習慣から中国と日本の文化を比較し、その共通点を見出すとともに、日本文化の包容力の大きさを強調している。

広東の潮州人が「生魚」を食べる例を挙げ、彼らが生魚を食べる時の食べ方として、海苔や大根の千切りを加えるが、これは日本人の「刺身」の食べ方と同じだという。彼はまず、中国人の生魚の食べ方と日本人の刺身の食べ方が同じであるということから、刺身は中国から伝来したものであると推測した。

(3) 郭沫若の民族観と戦争観

郭沫若は、感受性が最も強い青年時代を異国日本で過ごした。また、日本人の女性と結婚し、共に暮らして23年間の歳月を送った。さらに、詩人、考古学者、脚本家、政治家として、また中国政府の要人として名を馳せ、様々な歴史的事件に遭遇して波瀾に満ちた人生を送り、1982年に亡くなった。88年間の長い生涯の間に見た日本や日本民族の姿を観察して得た彼の日本観は、まことに興味深いものがある。

この日本民族への高度の賛美の言葉は、郭の「告日本人民書」(1951年)の中に伺える(13)。「日本人民は、我々中国人と同じ、勤労、勇敢且つ愛国心を有する民族である。」

しかし、彼は日本留学の感慨を語って、「我々は、日本で留学する時、西洋の本を読み、東洋の虐めを受けた。」とも述べている(14)。

彼は、このように日本留学の感想のなかに、日本民族への「賛美」と「不満」の両面性を抱いていた。実は、郭の日本での留学十年(1914年～1923年)は、日中関係史における極めて

緊迫した時期であった。中国国内の政権の激しい交代と、それに伴う内部の紛争があいついで起こっている。一方、外からは帝国主義者の侵入が段々酷くなり、中国の半植民地化は次第に深まっていった。郭沫若の留学十年の体験及び彼自身の言行とその歴史背景、特に中日関係に影響を及ぼした一連の事件との関わりを探ってみよう。「専門知識を学び、国を救おう」という初心をもって、郭が、1914年1月に日本において学問を探求する生活を始めた時、中国では、孫中山に代わって登場した袁世凱の帝政への回復の野心が全国の民衆の怒りを招き、兵士によるクーデタが発生した。こうした情勢の下、郭は、兄のわずかな経済支援で、留學生活を続けていた。彼が日本に到着して間もなく、1914年7月に第一次世界大戦が勃発した。これは郭にかなりの衝撃を与えた。彼は、家族への手紙の中で、次のように書いている(15)。

吾慨乎打戦者尽是神仙、而遭災者唯我百姓。

戦争をひき起こす者は、みな神仙（皮肉で、神仙のように災難に遭わない、不死の意）だが、災難を受けるのは我々民衆だけだという意味だが、これは、戦争を引き起こした者達への非難と抗議の意と、戦争中には最大の被害者になる人民への同情の心理を表している。

海外留学生を含む一人一人の中国人が最も衝撃を受けたのは、1915年1月に日本による「対華二十一か条要求」が打ち出されたことである。この不当な「二十一か条」の要求は、直ちに中国全国民の反発と抗議を引き起こした。日本に留學中の中国人も積極的にこの抗議運動に参加した。抗議するために同盟休校に加わって帰国した留学生も少なくなかった。郭も5月7日に上海に帰り、三日間滞在後、再び日本に戻ってきた。この行動について、彼は、のち『創造十年』の中でこう述懐している(16)

私は日本に来てから二年目、日本が「二十一か条」を打ち出し、中国に無理やりに承認させたので、私は同年の5月7日に何人かの同級生と一緒に上海に帰った。その時、私は、こういう律詩「哀的美頌書」を創った。(1915年1月に日本政府が中国駐在の公使日置益に対し、袁世凱に直接中国を滅ぼす「二十一か条」を提出するよう命じ、5月7日に最後通牒を出し、24時間以内に返事させる。ということを目指す)

郭が日本に渡ってから5年目、つまり1918年に、中日関係史においても、中国人日本留學史においても、大変注目すべき事件があった。それは、留学生による「反中日共同防敵軍事協定」運動である。「中日共同防敵軍事協定」に反対するため、日本留学生がこぞって約二週間のストライキを行った。郭も参加した。『反中日共同防敵軍事協定』の運動は過激なもので、中国人留学生をして日本人全体に敵意を持たせるほど高まりを見せた。例えば、当時日本人と結婚していた中国人留学生を離婚させるといったようなことも発生した。それを拒否すれば、民族の「裏切りもの」とする呼びかけがなされた。多くの人びとはその呼びかけに応じたが、当時、日本人女性と結婚していた郭は、この勧誘に応じなかった。誰よりも強い愛国心をもっていた郭沫若は、留学生たちに呼応するか、妻を守るかという板ばさみにあい、精神的苦しみを味わった。折から中国で、「新文化運動」とも言われる「五四運動」が起こったが、日本のメディアは「五四運動」後、中国人学生を「学匪」と罵った。これに対して、郭は激しい憤慨を示し、抗議のため、「匪徒頌」と題する詩歌を書いた(17)。

郭の民族的な怒りと反抗の意志は、彼の詩や小説などにもしばしば見受けられる。1919年11月15日の『新中国』に、郭の第一編小説『牧羊哀歌』が掲載された。郭は自伝『学生時代』の中で、この小説の意図を「朝鮮を舞台とし、排日の感情を朝鮮人の心の中に映した。」と述べている(18)。

このように日本軍閥への怒りを表す一方、当時の日本人に対する郭の印象はどうであったのか。異国に身を寄せる留学生にとってその国の人々に対する認識は、まず、日々の肌での触れ合いすなわち、日常生活から得られるものであるだろう。郭は、十年間にわたり日本で留学生生活を送った。しかし、日本人そのものについて、述べることは意外に少なかった。ただ、当時の自分の生活ぶりをもとにして書いた小説『月蝕』(1923年9月2日、上海『創造週報』に発表した)の中の一節にこう記している(19)。

1917年、我々は日本の岡山市内の一つの辺鄙な横町に住んでいた。横町の奥に「二木」という名字の隣人がおり、中学校の漢文の先生だった。日本人は我々中国人に対して、いくらかの敬意を持っているのは、ただ二種類の人である。一種類は60才以上の老人で、もう一種類は漢文を専門的に研究している漢文学者である。

点から面を想像することができるように、この短い記事から、当時のほとんどの日本人が中国人を軽蔑していた様子が読み取れる。

郭は医学の勉強をしてきたが、結局、魯迅と同じように「医を捨てて、文に携わる」道に進んだ。むろんこれには彼自身の先天性の聴覚難という事情があることと無関係ではないが、彼の日本での留学時の見聞と体験とも深い関係があると思われる。九州大学在学中の以下の出来事が直接の決意の導火線となった(20)。

福岡のある工業展覧会を見学した時、彼は、展覧会が「台湾館」「蒙満館」を設け、館の中の茶室でわざと台湾の女性を召使いとして雇用していた光景を見て、宗白華宛に出した手紙の中で「事件は小さいが、私は国体を損なわれたと思った。」と述べ、それがきっかけで郭は「医学を捨てて、文学に携わりたい」と考えるようになった胸中を吐露していた。

このように、様々な辛い体験を経験した郭は、1923年に留学生生活を終えたのである。

2. 郭沫若の日本観と周作人・郁達夫の日本観との比較

(1) 三者の日本観の類似点

木山英雄は、周作人に対し、「中国の文学者で、周作人ほど日本と日本文化に深く関った人物は他に見あたらない」と語り(21)、伊藤虎丸は郁達夫に対して、「同時期の留学生の中でも、彼が最も日本人の生活の内面に入り込んで、それを理解していた中国人だった」と、評価を与えている(22)。周作人は、誇りと屈辱にまみれながら「長寿多辱」の不遇な一生を送った。

一方、郁達夫は、留学中に同時代の日本文学の一潮流にほとんど「沈没」し、佐藤春夫という特定の作家を「崇拜」までし、抗戦中の南洋流浪生活においても、軍国日本を憎みながら、

日本人に対してなお好意ある理解を捨てきれず、あげくに日本の憲兵に謀殺され、才能溢れる短い生涯を閉じた(23)。

また、郭沫若は、日本に留学して日本人女性と結婚し、その後、さらに日本で亡命生活を送り、ついで一切を捨てて日本を脱出し、解放後は、その経歴を生かして両民族の交流に努めた。

この三者ともに、日本と日本民族にそれぞれの認識理解を持ちながら、一生を通じて、「親日」と「反日」の両者の間を往来しつつ、日本との関係を断ち切れなかった。彼らは帰国後、全く違う道を歩んでいた。しかし、いずれの道も、それぞれ日本との関係や彼ら自身の日本認識、つまり日本観と深く関わっていた。三者ともに、日本と深い関係を結び、日本に愛と憎しみの混じった複雑な感情を持っていたことも間違いない。ここで、三者の日本観を比較し、その共通点と相違点を見出し、三者への再評価を試みたい。

周も郁も郭も、いずれも日本文化に対する深い考察をおこなっている。しかも、彼らは自分の目で見た日本や日本文化を、各自のルートで中国に紹介している。これが三者の共通点の一つである。この意味から言うと、三者は日本文化の伝播というメディアの役割を果たした。幼い頃から、伝統的な中国文化の薫陶を受けていた三者は、日本文化と接触した時、自然に自国文化と対照した上で、異文化とかがわっていたのである。当時、もっとも全力を注いで、幅広く日本文化を紹介していたのは、周作人であったが、その「日本文化は創造的な模倣」という見解においては、周作人と郁達夫が一致しているのも興味深い(24)。

中国からさまざまな文化要素を採入れながら、纏足、宦官、八股文、阿片の四つだけは受容しなかった日本文化の、「簡潔」「自然」を尊ぶ傾向を周作人は心から好んだ。そして、日本文化に対してもろもろの流行を貫く不易なる性格への論及を始めた。昔は中国の、今は西洋の模倣にすぎぬといわれる日本文化には、独自の性格、したがって価値がある、というのが周作人の主張であった(25)。いまからみれば、当然の主張のようだが、当時の中国人の、由来久しい文化的な日本蔑視の上に、近代の政治軍事力への反撥さえ加わった中で、彼の見識と立場の特異さは特筆すべきであると思う。

郁達夫は、日本に上陸した途端に、「日本芸術の淡白多趣、日本民族の刻苦忍耐」の好印象を持った(26)。後に日本文化に言及した時、「礼教は中国に倣い、政治・法律・軍事および教育などは仏や独にとり、生産事業は欧米に学んでいるが、しかも、あの生を軽んじ国を愛する、労苦に耐える辛抱強い国民性が中心の支柱になっている」と語り(27)、日本文化は「独創性に欠けてはいるが、その模倣は創造的な意味を持っている」という見方を示していた(28)。

このように、周作人も郁達夫も、日本文化は創造的な模倣であると断言している。ただし、両者の違う点は、この創造的な模倣性についての論述の根拠である。周作人の視野は風俗習慣などの面に限っているが、郁の視野は政治・文化・軍事など広い範囲に及んでいる。

これに対して、郭沫若は歴史発展の角度から、中日文化の相互関係を論じ、その中から日本文化が包容力を持つという特質を見出した。これらは、三者が日本文化に対する着目点が異なり、また、それぞれの主張の出発点が違っていたことによるが、いずれも日本文化に興味を覚え、独自の認識を持っていたということでは共通している。

(2) 三者の日本観の相違点

まず、三人の日本観はそれぞれ、その重点の置き方が異なっていた。

「復古思想」に固執する周作人は、一人の中国の伝統的な文人として、日本文化を受けとめた。彼は、生活面を中心に日本文化を分析したが、衣・食・住の生活面から日本人の美意識を観察し、日本人の素朴にして淡白な生活習慣が自分の生活した江南水郷の昔の生活と非常に似ていることから、「日本にいた感覚は、半分が異域で、半分は古い昔」という感覚を有するに至ったのである(29)。

そして、ロマンチックな生活観を持っていた郁は、大量の筆墨を揮って日本の自然の美しさを賛美している(30)。彼は、もともと俗の世界から逃避するために大自然への帰属の念を持っていたが、至るところで日本の自然の美を讃え続けたが、これは、彼の日本観の特色である。しかし、一方、郭沫若は、みずからの体験によって(留学十年と亡命十年)、民族的な怒りを含めた特殊な日本観を形成した。彼は帰国後、文人でありながら、主に抗日戦争の前線に立ち、しかもその指導者になっている。日本および日本文化に関する言及はほかの二人と比べて、少なかった。

周作人や郁達夫、郭沫若の三者はともに、中国の著名な文人であるが、日本留学体験者で、日本と深く関わったことは周知の事実である。だが、日本文化をもっとも多く語った周作人は、戦争中に日本側の協力者となり、全中国人の非難を浴びた。彼は新しい中国の成立後も、常に、批判される標的となり、生涯にわたり「裏切り者」の罪名を被ったままであった。他郷で五十歳の若さで結局日本憲兵により殺害された郁は、日本軍閥へ恨みを持ちながら、最後まで日本に好意を寄せた理解者であったと評価されている。一方、同じ日本留学体験をした郭沫若は帰国後、様々な革命運動に積極的に参加し、新中国の誕生後、中国政府の要人として政治舞台に立ち、活躍した。とくに、中日友好協会名誉会長に任命され、中日友好のため全力を尽くしたことはよく知られている。

以上のように、三人が歩んだ道、及び一生に受けた生死榮辱、毀誉褒貶は実に様々である。ここからは三者の生き方の違いが伺える。

周と郁と郭三人の人生軌跡は、もとより時代の影響があったとしても、もっぱらの原因は彼ら自身の性格によって異なるものとなった。タイプで分類すれば、周作人が保守的思考型で、前向きに取り組む行動力に欠けていた。また、郁達夫は感傷的で、つい極端なところまで走ってしまい、冷静さが不足した性格を持っていた。そして、郭沫若は常に政治の表舞台に立ち、自分の力を最大限に発揮してその人生を送った。

このように、彼らの日本観の相違点と彼らの持つ個性と生き方の違いなどを分析してきたが、また、三人の留学背景が異なっていたことも、それぞれの日本観の形成に大きな影響をもたらしたと考えられる。郁と郭はほぼ同時期に日本に留学したが、周作人は彼らより八年も前に留学した。時代背景も異なり、日本での経歴や体験も違っていた。周作人の日本留学当時は、中日関係が相対的に安定していた頃で、日本人から軽蔑されるような取り扱いを受けなかった。これは、彼が終生日本を愛し、日本文化を研究し続けることができた最大の要因になったので

はないか。

おわりに

小論においては、文人であり、政治家でもある郭沫若の日本観の内容と特徴について考究した。近代という極めて複雑な歴史的背景のもとで彼は、比較的環境に縛られることなく、客観的かつ歴史発展的な角度から、日本文化の包容力の大きさを論じた。

まず、彼は、中日文化の相互関係から日本文化の包容力の大きさを讃美した。「資本主義以前の文化は、中国から日本に流れていた。資本主義後の文化は、日本から中国に流れている」。そして、結果としては、日本は「十分な成功を収めた」、それに対して、中国では「失敗した」。この中日文化の逆流現象の論述が、当時の情勢下、きわめて得難いものである。これも真の歴史学者として相応しい論調であろう。むしろ、この相互関係と、それが生み出した効果によって、中日文化の違いを単的に明らかにしている。西洋文化の輸入に成功した日本文化の包容力の強さを賛美している郭の、この考え方こそ、彼の日本文化観の核心である。

次に、郭は、日本の風俗習慣から、中国文化の影響を受けたいくつかの実例を挙げ、日本文化の包容力の大きさを強調した。「日本の畳」は中国古代の「席地而坐」と同じもので、また、日本の茶具の様相や発音から見た日本の「刺身」が、もともと中国から伝来してきたと、郭は断定した。このように生き生きとして筋道がよく立って、論述したことも、郭沫若の日本文化観の特色である。郭沫若がこのように日中文化交流史や日本の習俗などの面からさまざまな実例をあげ、日本文化の包容力の大きさを賛美していた。これは一定の評価を与えるべきだろう。彼は、外来文化の精華を吸収することによって、日本はその独自の文化を生み出したと認識している。

筆者はこの点が、彼の日本観の軸であり、彼が日中交流に懸命に力を注いだ力の源ではなからうかと思う。

小論の後半では、郭沫若の日本観と、同じく日本留学を体験した文人周作人と郁達夫の日本観とを比較して、その類似点と相違点を分析してきた。この研究は、近代中国人の日本観の全貌を解明するための出発点になれば幸いだと思う。

郭は、二十年に亘り、日本に滞在した。この体験はその後の彼の文学作品および政治活動などの面にどれほど影響を与えたのかという課題が残され、今後、引き続けてこの方面への研究を進めていきたい。

「注」

- (1) 周作人 (1885 年～1967 年)、中国近代文学者、日本留学体験者。彼については、張淑琴「周作人の日本観」(『文化学研究集録』第 5 号大阪府立大学大学院 1995 年) を参照。
郁達夫 (1896 年～1945 年)、中国近代小説家・詩人、留日体験者。彼については、張淑琴「郁達夫の日本観」(『人間文化学研究集録』第 7 号 1997 年『人間文化学研究集録』第 7 号大阪府立大学大学院総合科学研究科) を参照。
- (2) 『辞海』(上海辞書出版社 1979 年) P. 452. 参照
- (3) 『沫若自伝② 学生時代』(三聯書店 香港分店、1978 年) P.10.
- (4) 『郭沫若全集⑩』(人民文学出版社 1992 年) P. 79
- (5) 中華キリスト教育青年会は、1906 年に日本東京で成立し、王正廷が第一任総幹事に就任し、1922 年以後、馬伯援が総幹事を担任することになった。会所は神田保町にあり、当時の中国人留学生たちに交流と集会の場としてよく利用されていた。
- (6) 前掲書、『郭沫若全集⑩』 P.80.
- (7) 同上、P.87.
- (8) 前掲書、『郭沫若全集⑩』 P.84.
- (9) 同上、P.88.
- (10) 前掲書、『沫若自伝② 学生時代』 P.35.
- (11) 前掲書、『郭沫若全集⑩』 P.83.
- (12) 同上、P.94.
- (13) 同上、P.95.
- (14) 黄淳浩編『郭沫若書信集』(中国社会科学院出版社 1992 年) P.28.
- (15) 李保均著『郭沫若青年時代評伝』(重慶出版社 1984 年) P.194.
- (16) 同上、P.65.
- (17) 前掲書、『郭沫若全集⑫』 p.12.
- (18) 同上、P.62.
- (19) 前掲書、『郭沫若全集⑨』 P.51.
- (20) 李保均、前掲書、P.194.
- (21) 木山英雄編訳『日本文化を語る』(筑摩書房、1973 年) P.281.
- (22) 伊藤虎丸、祖父江昭二、丸山 昇編『近代文学における中国と日本』(汲古書院 1986 年) P.208.
- (23) 張淑琴、前掲論文「郁達夫の日本観」 P.73.
- (24) 張淑琴、前掲論文「周作人の日本観」 P.51.
- (25) 同上、P.52.
- (26) 王自立、陳子善主編、『郁達夫研究資料 上』(天津人民出版社、1983 年) P.54-55.
- (27) 同上、P.57.
- (28) 同上、P.57.
- (29) 前掲書、『周作人全集③』 P.515.
- (30) 郁達夫の留学生活そのものを反映した自伝性の作品は三つあり、『沈淪』(1921 年 5 月)、『銀色の死』(1921 年 1 月)『南遷』(1921 年 7 月)

郭沫若的日本观

张 淑 琴

郭沫若(1892~1978)是中国近现代杰出的作家、诗人、历史学家、剧作家、考古学家、政治家和著名的社会活动家。是中国近代文学·历史学的先驱。他的业绩非常广泛。浪漫主义风格的处女诗集《女神》,揭开了中国文坛的新画面。在中外,关于他的文学,戏曲等著作的研究已有不少。

然而,郭沫若除了在文坛上留下了丰功伟绩以外,还作为一名政治活动家,为中日文化交流作出了杰出的贡献。对中日交流起到了桥梁的作用。

在近代中国面临的“内忧外患”局势下,为了“学习专业知识,救国救民”和当时很多文人(如鲁迅、周作人、郁达夫等)一样,在青年时期、开始踏上了日本留学的征程。郭沫若先后在日本度过了长达二十年的时光、也就是所说的“留学十年”(1914~1923)和“亡命十年”(1928~1937)。那么,他是怎样看待日本文化和日本民族的呢?本论文通过对他的作品、对他的言论进行了斟酌和整理、总结出了他的独特的日本文化观。主要对以下几个方面进行了论证。

一. 郭沫若的日本文化观的主流:即日本文化的包容性。

从日中文化交流发展史和日本人的生活习俗的两方面来阐述了郭沫若日本文化之观点:日本文化的包容性。

二. 在中日关系极其紧张的情形中、郭沫若对日本的民族给以了赞否两方面的评价。

三. 把郭沫若的日本观和周作人、郁达夫进行了比较、就三者的日本观的共性和异性进行了试析。

通过对中国文人、政界的要人郭沫若(战后曾担任中国政务院副总理·科学院院长·文化教育委员会主任、人大常务副委员长等职务)的日本观的分析和研究、对近代中国人的日本观的全面解明助以微薄之力。